

41

福井崇蘭館旧蔵元明養生書について

劉 青

京都大学 人間・環境学研究所博士課程

江戸末期、京都の医家福井氏は数多く貴重な医書を持ち、蔵書家として有名であった。福井氏の蔵書は福井崇蘭館本と呼ばれている。二〇一八年、杏雨書屋開館四〇周年記念特別展示会で『福井崇蘭館の秘籍』が公開され、後に文化庁寄託福井崇蘭館本目録が発表されたとともに、数多く宋元明の漢籍が収蔵されていることがわかった。今回、現在杏雨書屋に寄託されている福井崇蘭館本の養生書を中心に調査を行った。本報告は元代養生書『山居四要』『三元参贊延寿書』、明代養生書『懼仙活人心法』三書を取り上げ、それぞれの版本、内容及び日本への伝播を分析したい。

古代から、人々が病に対抗し、長寿を求めるために、行っていた健康法は「養生」と呼ばれている。養生とは、現代でいうところの健康の管理、増進、病気の予防、治療、公衆衛生などといった分野を広く含んだ概念である。養生思想とその長生の諸技法は、先秦中国文化の中で発生し、育まれてきたが、とりわけ元代の発展を経て明代において世俗に広く浸透した。社会経済の安定と生活の向上とともに、士大夫階層にとどまらず、庶民の間でも、長寿延命法への関心が高まり、養生ブームが巻き起こった。その間、様々な養生書が刊刻され、朝鮮、日本に伝来し、広く読まれた。

『三元参贊延寿書』は元代の李鵬飛によって著された五巻本の養生書である。天元の寿、地元の寿、人元の寿及び、換元、補薬など道教的な養生術が紹介され、『正統道蔵』洞神部に収録されている。日本の養生書『延寿撮要』『延寿類要』『養生記』は本書を参照した痕跡がいくつか見られる。

『山居四要』は元代汪汝懋に編纂された養生書である。四巻本で「攝生之要」「養生之要」「衛生之要」「治生之要」で構成されている。本書は元代楊ウの著作を編纂し、手を加えたものであり、実践しやすい日常的な養生術が全面的に紹介されている。福井崇蘭館本は従来から知られている『寿命叢書』本と『格致叢書』本以外の重要な版本と見られる。曲直瀬道三が本書の影響を受け、『山居四要抜粹』を著したのである。

明初朱権の『懼仙活人心法』は総字数が約二万字、上下二巻からなる書物である。上巻は「未病を治す」を主旨とし、「中和湯」「和氣丸」「養生之法」「治心」「導引法（八段錦、去病延寿六字法、四季養生歌、臓器保養など内容を含め）」「保養精神」「補養飲食」の七章で構成されている。下巻は「已病を治す」を主旨とし、「玉笈二十六方」「加減靈秘十八方」において、二六種類の薬方、一八種類の薬方がそれぞれ記されている。日本には、福井崇蘭館蔵の明刊本以外に、和刻本と江戸写本も現存している。「治心」の思想を中心に庶民向けの養生書であり、前代の成果を受け継ぎ、明代養生ブームにおいて先駆けになったとされる書物である。

以上のように、福井崇蘭館本医書が新しい資料を提供したことによって、元明養生史研究においてより深く検討ができており、近世に於ける養生書の伝播と受容を解明するにも重要な役割を果たしたことが明らかになった。

(本発表は、公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋二〇一九度杏雨書屋研究助成「明代の養生書と日本的伝播」による研究成果の一部である)